



標注曾丹集

序典

特別
イ 4
3163
102



あやうき根のより中ぬく圓融花山の
こころの時代はあつて衆人の多きをな
るゝもよもやもよもやの世に
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
其のあつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて

文化の十とせあつてはあつてはあつて

藤名子のりか

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter, spanning the right page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter, spanning the left page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a list or index of names and titles. The text is written vertically on the right page of the manuscript.

後長

Handwritten text in a cursive script, enclosed in a rectangular border. The text is written vertically on the left page of the manuscript.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is contained within a rectangular border and consists of approximately 12 lines of writing.

Handwritten text in a cursive script, similar to the one on the opposite page. It is contained within a rectangular border and consists of approximately 12 lines of writing.

文化十年(1873)の冬

源寛光

曾禰好忠家集

校正大意

とくしとせあものよこも。其茂季鷹大人のゆゑに
これのまじはるゝ。此集を二つありの事あり。
そのまじはるゝを合せて。おのれが本よ
き。又師のゆゑに。おのれが本よ
おのれが本よ。本がまじはるゝ。其沖河原系の本が
よ。おのれが本よ。本がまじはるゝ。おのれが本よ。
その本がまじはるゝ。おのれが本よ。おのれが本よ。
本よ。補遺を。おのれが本よ。おのれが本よ。又自



曾祐好志家集

毎月集

わら玉だしの日敷をぞいづ。菅のねのやうと
 鳥の喜の目イ元をイ元。まのあゝことばかひイ元ふイ元ふイ元はイ元かイ元いイ元め
 けり。けりイ元はイ元さイ元くイ元すイ元月イ元はイ元またイ元いイ元づイ元。月イ元かイ元しイ元るイ元
 青柳のいとまの情イ元をイ元まイ元よイ元をイ元れイ元たイ元くイ元ねイ元をイ元
 まげイ元ばイ元まイ元れイ元もイ元あイ元れイ元をイ元ほイ元まイ元さイ元。花イ元のイ元あイ元るイ元をイ元見
 したイ元。たイ元いイ元もイ元さイ元うイ元とイ元まイ元さイ元くイ元わイ元どイ元人イ元をイ元かイ元くイ元さイ元款イ元を
 けり。かイ元はイ元けイ元りイ元けイ元きイ元るイ元ものイ元うイ元。物イ元さイ元くイ元。花イ元れ
 ちるイ元喜イ元のイ元あイ元。本イ元のイ元喜イ元れイ元物イ元のイ元秋イ元のイ元あイ元りイ元月イ元の

古今序引へ
 その文枕をよまは
 られきつと冬を
 小松

重之集

あまの川あるはるはるはるの

あまの川あるはるはるはるの

あまの川あるはるはるはるの

あまの川あるはるはるはるの
別記はつまびらり

あまの川あるはるはるはるの
あまの川あるはるはるはるの
あまの川あるはるはるはるの

春のちぐさ

後拾遺春上

山城

あまの川あるはるはるはるの
あまの川あるはるはるはるの
あまの川あるはるはるはるの

あまの川

下の句為鳥の〜やひま

宝治二年百首 知家

あまの川あるはるはるはるの
あまの川あるはるはるはるの
あまの川あるはるはるはるの

大和

あまの川あるはるはるはるの
あまの川あるはるはるはるの
あまの川あるはるはるはるの

新六帖 光俊
 光俊の御書
 蜻蛉日記三月十日
 のあまのうらみ

万世
 拾遺哀傷 大僧行基
 万世の御書

海はも雀のうらみ 来りてむら ありとて かくら
 善はく来りてむら 位吉のま けは 海はも雀のうらみ
 梅は河を流るる けは 来りてむら 海はも雀のうらみ

二月

梅は川を流るる けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 のうらみ けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 なごくも けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 海はも雀のうらみ けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 けは 来りてむら 海はも雀のうらみ

八代 菅原
 菅原の御書

新撰六帖 光俊
 三月十日
 日本紀 腕とあまの
 後撰春下
 まつ

あまのうらみ けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 のうらみ けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 なごくも けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 海はも雀のうらみ けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 けは 来りてむら 海はも雀のうらみ

三月初

梅は川を流るる けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 のうらみ けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 なごくも けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 海はも雀のうらみ けは 来りてむら 海はも雀のうらみ
 けは 来りてむら 海はも雀のうらみ

貫之集
 六帖
 六月のついでに...

時をわのよ物ねも...
 世中の来せく...
 六月中

万葉十四
 拾遺哀傷
 古今雜下
 後撰夏 兼捕朝臣

うの小原て...
 後拾遺雜
 同其
 風雅集
 新後拾遺集
 四月終

源川百首
 唐とせは母をば母をば
 谷川と清き水の木でては
 夕羽子の愛もや
 六帖
 大あやせぬのよもよもは
 ひてゆん
 ぞくまらふ幸探探
 相模集
 明詠
 但能心静即身涼

拾遺夏 大宰臣藤原
 かこふみ八万葉はかしはま
 戸神の又の御名あふり
 祈年祭祀詞に此神の御
 名とそらう

古事記は天岩別神とて
 戸神の又の御名あふり
 祈年祭祀詞に此神の御
 名とそらう
 唐岑参詩
 深園日暮乱飛鴉極目蕭
 條三兩家

万葉八
 秋さきのほぬこり一か花の
 わらわらふのちりちり
 あらてふれともある万葉四
 庭は主麻手新すこち麻
 手とた麻のちと切入
 誤としてよみれりあふり
 誤字を説長れ
 こよまきぬ

ぶらぶらいよけりす妻のあはれいん物あはれいん物
 わが藤一麻のいん物あはれいん物あはれいん物
 大あやせぬのよもよもは
 ひてゆん
 ぞくまらふ幸探探
 相模集
 明詠
 但能心静即身涼

五月終

小山のいん物あはれいん物あはれいん物
 花あはれいん物あはれいん物あはれいん物
 庭は主麻手新すこち麻
 手とた麻のちと切入
 誤としてよみれりあふり
 誤字を説長れ
 こよまきぬ

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

六月初

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

とりの水守秋實寺秋雑
記は永守とせしむるが未の
秋十首の節よとび初わら
う老
後撰 秋上 よろしく
あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる
秋をわらうのこともあめり

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

六月中

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

あはれなる海の花の香は華やかに咲きわたる

万葉筑波山まのむら
汗まのむらむらむらむら
こころの露濃まのむら
こころの汗濃まのむら

古今秋上 上まふり
まのいふまふり
指さすまふり秋風のう

天の若橋七夕の夜多
天の川の若橋とよま
いふまふり一下の白

此の末木はうこの海と
袖中抄まふりこの海と
出さうこまふりこの海と

初秋七月 初光
秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり

詞花秋
秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり

秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり

秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり

秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり

此の末木はうこの海と
袖中抄まふりこの海と
出さうこまふりこの海と

和名抄 音同
也穂 音保
岩戸の雲名あまの
天の戸とよま

和名抄 音同
也穂 音保
岩戸の雲名あまの
天の戸とよま

秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり

七月中

秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり

秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり

秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり
秋のついでとよまふり

古今秋上 よき一 秋のせまはまづむし
のちをかくるれとあきて
いさむつてえ

古今恋一 よきあふ
俗行かれまゝ秋物なす
あつてはかたきあき

おかしけれ秋ののイ まのイ
くはだそくはれもまゝ まのイ
秋の好れもむし まのイ
抱のみよあやまたね まのイ
七月終 イ元 下イ
とせを妻あきまじ まのイ
新古今秋上
秋風のはきは吹く春物に
拾遺雜秋題 後人あき
おもしろし まのイ
人あはか まのイ
秋風の香 まのイ

古今恋五 僧遍照
今とてひてあり秋う
かひひしのねのま

未世八 光俊朝臣
うまの まのイ
万葉八
引枝古波 まのイ
千載集秋下 源兼昌
あつてはかたきあき
むしの まのイ

こゝ人のおきて まのイ
二葉 まのイ
われが まのイ
たひ まのイ
ま まのイ
八月上
く まのイ
お まのイ
く まのイ
福 まのイ

重之集
 夫木廿
 六帖二
 此内重之集と六帖の筑
 前へ今のれよう

予後抄は川風
 凡そいふは凡そ
 凡そいふは凡そ

予後抄は川風
 凡そいふは凡そ
 凡そいふは凡そ

美濃
 かみごころの海をくぼく
 沖中よるねえはあまの
 待ねてあやねぬらん
 くるこの月とるり時
 十一月
 十一日

さあつにせがきた
 けをさしはえりそ
 海くのもねまき
 中みづまの網
 んのゆるわづ
 めつあきき
 ねるの目
 ねるの目

大あやめ
 かしら屋の松の枝
 かしら屋の松の枝
 わいんさか
 暮冬十二月初

うはちくがら
 わいあり
 君あつと
 海ふよ
 心このあ

永久百首 俊頼
夜のついでにまのせきか
あはれなくもあはれつ
迷懐百首 俊成
あはれをわが心かたし
おとよふあまのまをわが
きぬく山に藤屋まま
陸

新古今恋三 源重之
流くはかばかかみ
あはれをわが心かたし

あまのついでにまのせきか
あはれなくもあはれつ
迷懐百首 俊成
あはれをわが心かたし
おとよふあまのまをわが
きぬく山に藤屋まま
陸

十一月中

百廿一

たつた未詳散木集意上
よき大友の馬場の舟に男
つらみをつらみをつらみ
あはれをわが心かたし
おとよふあまのまをわが
きぬく山に藤屋まま
陸

未の意上首の内よき
つらみのつらみをつらみ
あはれをわが心かたし
おとよふあまのまをわが
きぬく山に藤屋まま
陸

あはれをわが心かたし
おとよふあまのまをわが
きぬく山に藤屋まま
陸

十二月終

拾遺雜歌

與儀抄云...
 此平無之...
 後拾遺衣揚
 十二月...
 和泉式部...
 和泉式部...

序
 秋の落る木葉よらそたくらまわうと
 詞花冬
 海心本...
 拾遺雜秋
 つか無下同
 久末本

和名抄秀唐韻云秀
 漢語抄云朝生暮死也
 比平無之

秀唐韻云秀唐韻云秀
 漢語抄云朝生暮死也
 比平無之

むつこさむむつこのめ
 括こさし著聞集卷五
 西面の水干よびつこさ
 後のおこさむむつこさ
 堀河院百首
 基俊
 太木
 ま山のささげのせりかさむ
 つるさむれはわさささ
 後拾遺卷一 権僧正静圓
 あまのせのせりのつるさ
 多さあつむつとつとつ
 太木三 権中納言長方卿
 むつこのささむつこさ
 まつこのささむつこさ
 又万葉八春山乃開乃千鳥
 黒尔云 誤字あり 真淵翁
 宣長中の考あり

鳥ねがささむつこさ
 花さのさのささむつこさ
 花の面は青の花のちり
 花さのさのささむつこさ
 花さのさのささむつこさ

復十

花さのさのささむつこさ
 花さのさのささむつこさ
 花さのさのささむつこさ
 花さのさのささむつこさ
 花さのさのささむつこさ

古今秋上
 白雲にやならむらむら
 後拾遺集夏 権安補
 とれとれとれとれとれ
 かしこかしこかしこ

かふふの原類聚名所考

あまのささむつこさ
 ささむつこさ
 ささむつこさ
 ささむつこさ
 ささむつこさ

秋十

新勅雑上
 ささむつこさ
 ささむつこさ
 ささむつこさ
 ささむつこさ

新古今秋下
 山里の芳れまむつこさ

和名抄神靈類云大日神新撰陰陽書云大日神此止

金葉集意下とて一ハ
焉とてハ一葉のクハの神と云
和とありとのとてやん
古今集雜上とて一ハ
いハ一ハの神と云ハの神
をハの神と云ハの神

人妻とてハの神と云ハの神

ハの神

ハの神とてハの神と云ハの神

ハの神

ハの神とてハの神と云ハの神

一月ハの神

ハの神とてハの神と云ハの神

一ハの神

ハの神とてハの神と云ハの神

ハの神

8

後拾遺集意一藤原國房
ハの神の箇のうつせ見
ハの神と云ハの神
古今集意三とて一ハ
ハの神と云ハの神
ハの神と云ハの神

ハの神とてハの神と云ハの神

ハの神

ハの神とてハの神と云ハの神

ハの神

ハの神とてハの神と云ハの神

ハの神

ハの神とてハの神と云ハの神

ハの神

ハの神とてハの神と云ハの神

ハの神

花のうしろをみれば
この像は云はれぬ
あやめ

いろと

續後拾遺物名好忠

礼り未

ゆえ未

あはれなきをぞのせしめしはよむに
いかにあはれなきをぞのせしめしはよむに

しらぬえ

あはれなきをぞのせしめしはよむに
いかにあはれなきをぞのせしめしはよむに

しらぬえ

あはれなきをぞのせしめしはよむに
いかにあはれなきをぞのせしめしはよむに

かのえ

あはれなきをぞのせしめしはよむに
いかにあはれなきをぞのせしめしはよむに

かのえ

あはれなきをぞのせしめしはよむに
いかにあはれなきをぞのせしめしはよむに

けあけぬく

友則

古今意三
いのもは初とあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

みづのえ

あはれなきをぞのせしめしはよむに
いかにあはれなきをぞのせしめしはよむに

みづのえ

あはれなきをぞのせしめしはよむに
いかにあはれなきをぞのせしめしはよむに

一目わらわ

あはれなきをぞのせしめしはよむに
いかにあはれなきをぞのせしめしはよむに

一目わらわ

あはれなきをぞのせしめしはよむに
いかにあはれなきをぞのせしめしはよむに

一目わらわ

あはれなきをぞのせしめしはよむに
いかにあはれなきをぞのせしめしはよむに

五葉意一順

いあういあうのうたをききか
けくあんのねねんか

あせい

かほろあむらひのふよ咲花にきれ世をちぬべしとれ

みあふ

あふふねかへんあふねはあふふとあふふとあふふ

あふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

玉葉意四順

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

いぬぬ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

あふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふあふふ

万葉一有間皇子
名白の淡松枝をうま
かきつへあふふあふふ

下契沖阿無妻の
り補遺

補遺

○拾遺集卷第六別の人ありて人のことなる人
まうそかひけりてき 有祐の

唐がねのかささげに花の香を井をうに梅のつりぞ

○同卷才十七雅秋歌に 有祐好忠

忠かぬ人の善をぬ家富は秋の巻にて君来より

○詞花集巻之五に 有祐好忠

外心ありてのま枝は吹風の善をうそをわ梅の

○新勅撰集卷上歌に 有祐好忠

はなびれ梅のどし六帖げきよ織うす六帖の巻たる善の巻に

け歌家集よみかくて六帖才五機のりあり作忠を
あるとび方梅黄門何よりして好忠が善と
ふも入るありんおちつり

○賞与あり云能宣集云善の日はうごあまのいささ
ずありてきこりて梅のいほに梅をうあまの
とそ丹後梅善祐好忠かひけりてはし梅を
家とそが神白梅の花のいろをうしな人梅をわぞ知る
也

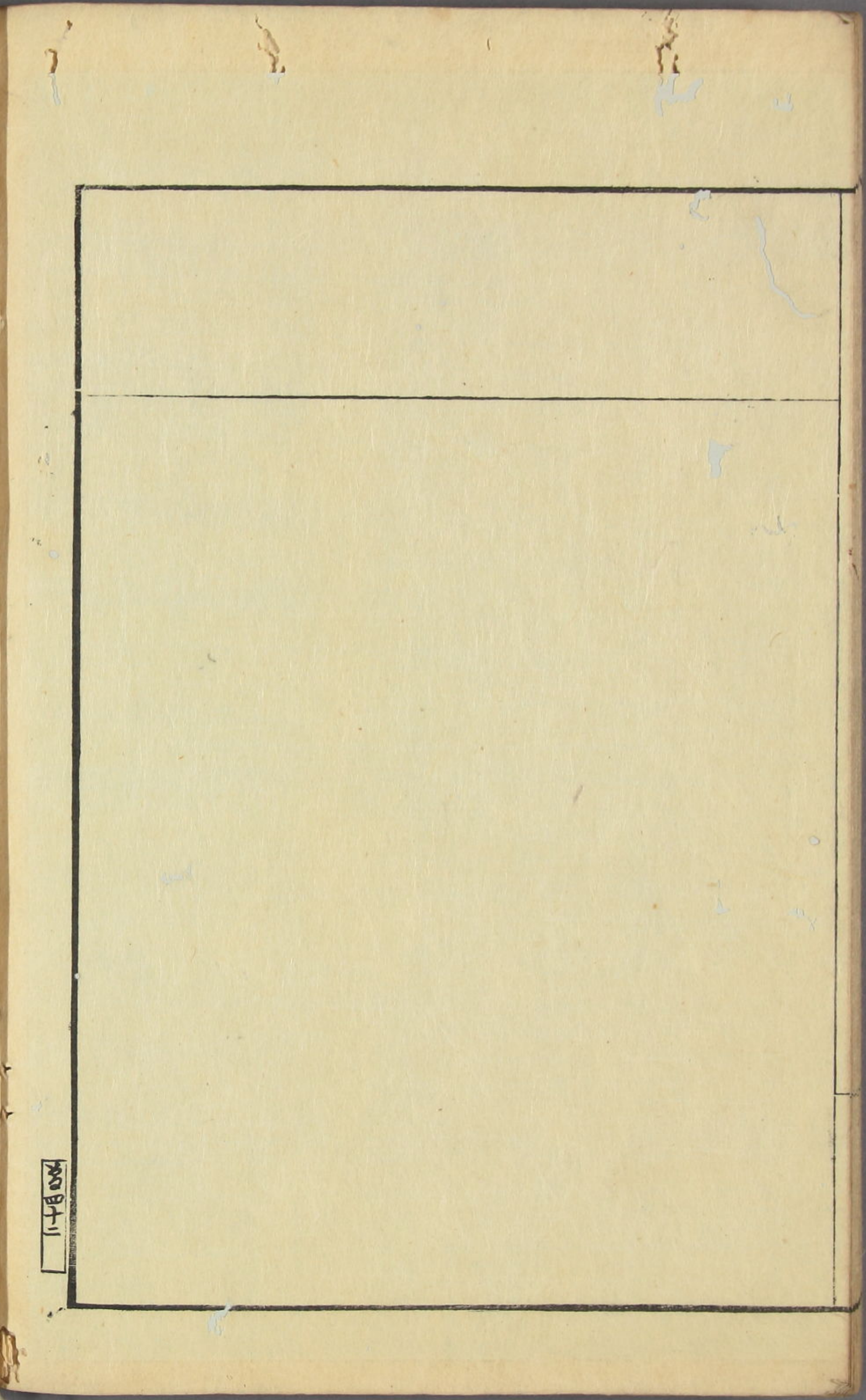
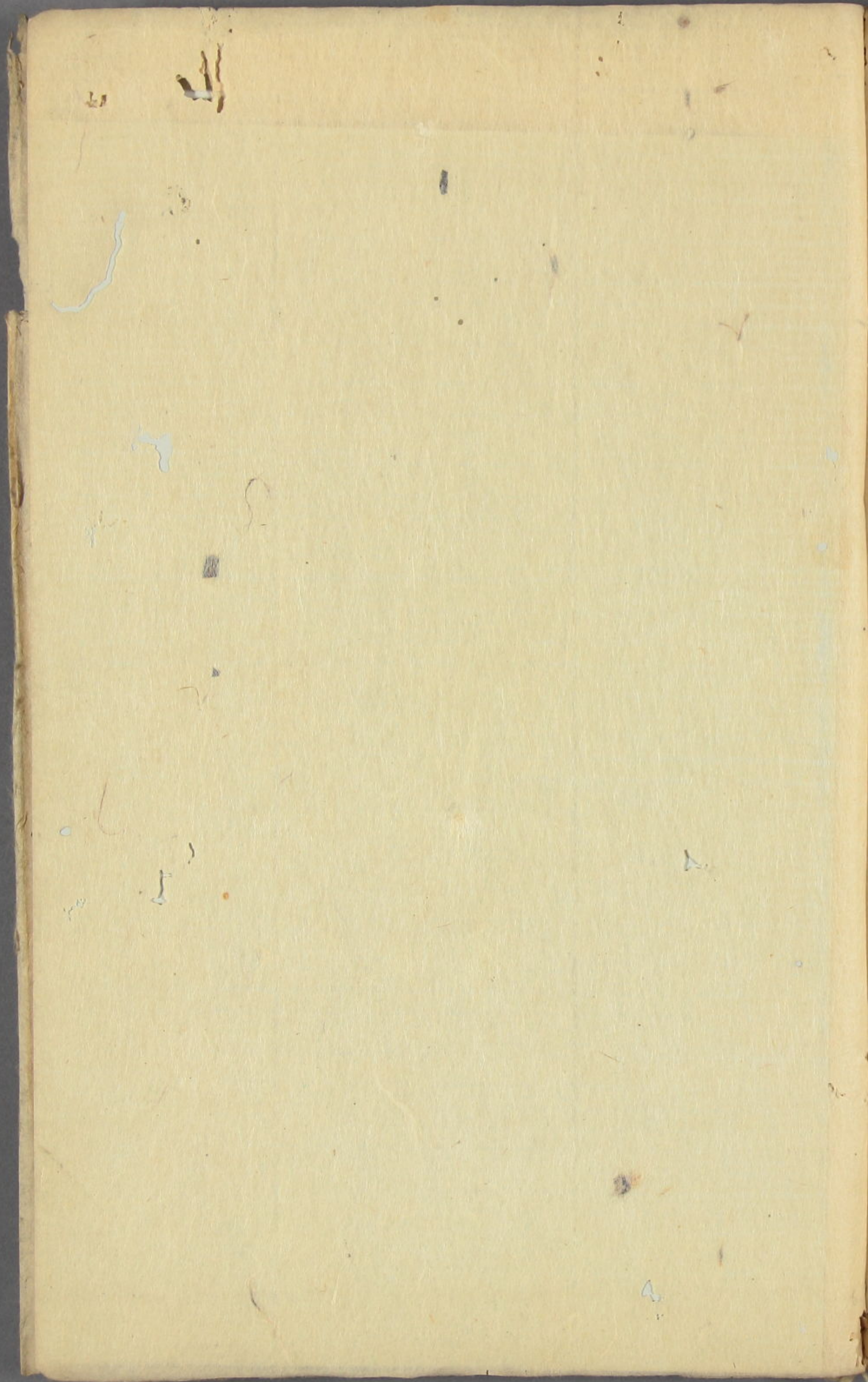
梅のいろをうしな人梅をわぞ知る
紅梅をうくありて梅のいろをうしな人梅をわぞ知る

▲中よむんがとにいとせよめる歌也。玉琴集よ明の歌を
載られたるものなり。いふ所のよのいふもの
のこともたわしといふなり。三その歌は後の人の
いふことなり。いふ本の中にも長流とつづる
せよとある本はたゞ其同と注し。拾遺集の
ことなり。新編古今集よあるもの十九代の勅撰
よいれり。歌を注し。いふ。おなつることをおなつる
よとある。いふ。いふことあり。いふことあり。

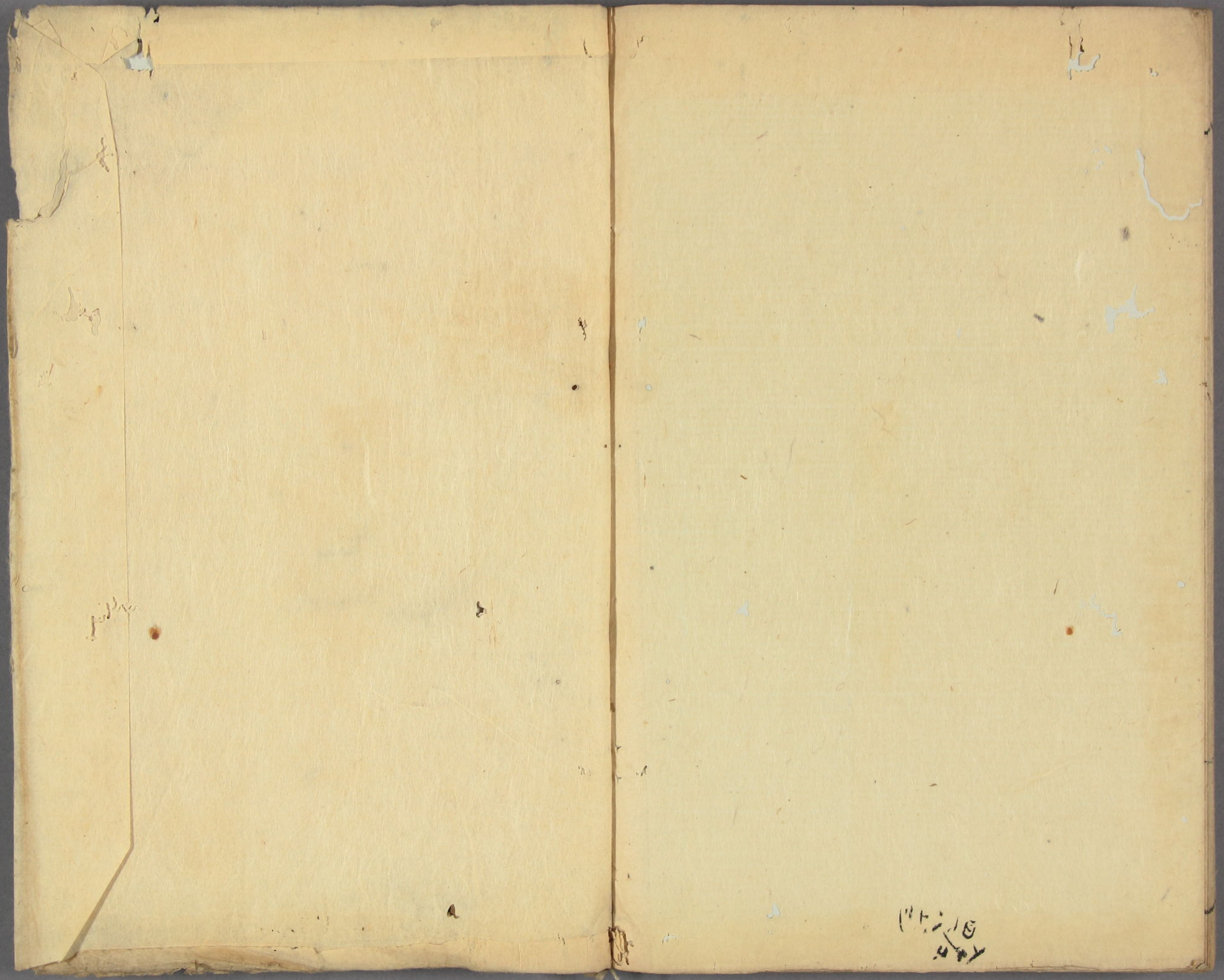
○再考補送。夫木抄三十一。寛和歌合 好忠
初集とあるの山里のあはれ集とある人さへや神のひつらんあひ

此歌新子載集各部より寛和二年及上野
合よのいふことあり

曾祜好忠家集終



100 Bt-11



1710

